

この項目を見てどう思われるだろうか？ まず気がつくことは旧約が多いということだろう。旧約は洗礼を受けたあと、体系的に学ぶチャンスは少ない。だから入門講座で丹念に読みたいたいと思うのである。

このコースでは聖書に親しむことを第一の主眼としている。聖書のおもしろさ、奥深さに接し、読むたびに新しいことを発見する体験をすることである。聖書の「正しい」解釈を知り、そこから教えや道徳の原理を導きだそうとするような「聖書研究会」的な読み方を主眼とはしていない。だから、その聖書を初めて読んだの第一印象を分かち合うことから始めることにしている。実際にいくつかのテーマを拾ってその例を示すことにしよう。

●「イエスと出会った人たち」

イエスと出会い、そして生き方を変えた人をここでは紹介する。

まず、聖書を離れて自分の生涯の中で自分を変えた出会いについて思い起こしてみる。どんな出会いが自分を変えたかを出し合ってみる。

そして次に聖書を読む。だいたい一回の集いで読む

の例はこの説明の仕方では納得がいくが、最初のペトロらに対する召命には当てはまらないのではないかとも思う。つまり、この聖書の読み方では聖書の箇所を選択が大切なのである。たとえば「百人隊長」の例(マタイ8・5-13)がこのテーマにより沿ったものかもしれない。

これを書いていて気がついたことだが、「あなたの信仰があなたを救った」とイエスがいわれたところだけ拾って読みながら、イエスの「信仰」についての考えを思いめぐらすのもいいかもしれない。

●「E.T.の説教」と「平地の説教」

④の「イエスの説いた神の国」ではマタイの「山上の説教」をまず取りあげる。

このときは英語の聖書も含めて、できるだけいろいろな訳の聖書を読み比べることにする。たとえば「心の貧しい人は幸いである」の「心の貧しい人」をどう訳しているのか、その訳の違いを見るだけでも興味深い。どの訳が一番心に響くのか、そこを皆で分かち合う。

さらに興味深いのは、マタイの「山上の説教」とル

箇所は四カ所であろう。あまり細かい言葉の解釈や状況説明は必要ない。ここでは次の四カ所を選んで読む。

ペトロやヤコブ、ヨハネたちへの召命の場面(ルカ5・1-11)、マタイの召命(ルカ5・27-32)、そしてザアカイ(ルカ19・1-10)、サマリアの女(ヨハネ4・1-30)を読む。イエスと出会った彼らは、イエスをどう見たのか。なぜ彼らはイエスに魅力を感じたのか。そしてなぜ、どのように彼らは生き方を変えたのかを想像する。そこに共通点があることにも気づいていく。ここでは違いよりも共通点が大事であろう。

結構いろいろな考えが生まれる。マタイ、ザアカイ、サマリアの女の中には、自分の本当にしたい生き方と異なった生き方をしていて、それが後ろめたさや意地や強がりとなって表れ、人から嫌われていた。

イエスは決してそれを嫌わず、かえって自分に注目し、周りの人に得意になれるように接してくれた。それでうれしくなって調子に乗りすぎて、ますますわかりからひんしゆくを買ったが、イエスはそれをとても高く評価していた。けれどもこの接し方は、特にファリサイ人たちがイエスを攻撃する材料になる。

このテーマでは、マタイ、ザアカイ、サマリアの女

カの「平地の説教」との読み比べである。イエスが本当は何をどう語ったのかは知るべくもないが、ここはマタイとルカという二人の福音記者の置かれた立場や性格、あるいは考え方の違いを想像してみる。マタイはユダヤ独立戦争で廃墟となったエルサレムでユダヤ人たちを対象として福音書を書いたとされている。ルカはギリシャ語を話すディアスポラのユダヤ人や旧約をほとんど知らない外国人を対象に書かれたという。

実際に、貧しい人、飢えている人、泣いている人、対象に語りかけているのはどちらなのであるか。あるいは平和を欲し、迫害にあう立場にいた人に語りかけているのはどちらであろうか。

●「放蕩息子」

イエスの「愛の教え」のなかで「放蕩息子」をどう読んだらいいだろうか。これもいろいろな読み方があるだろう。

なぜ「よきサマリア人」や「マルタとマリア」そしてこの「放蕩息子」の話がルカだけにしか載っていないのかということも不思議である。言えることは、ルカはストーリー(物語)性のある短い話が実にうまい